

ミナミクロマル 南黒丸 珠洲郡直郷の黒丸は、明治に至つて南黒丸と改められた。

ミナミゴホリ 南郡 梅城録に『賀州南郡地名直下里』とあり、北陸七國志には能美・江沼等の南郡を攻取けると見え、天正四年八月一揆首領連署して下間刑部御法眼に與へた訴状には、南兩郡とある。江沼・能美を南郡というたと見える。

ミナミササヅカ 南笹塚 石川郡横江郷に屬する部落。寛文十年の村御印には南笹塚とする。

ミナミサンゴウ 南三郷 鹿島郡に屬し、藩政時代では、麻生・須能・音澤・小栗・横山・外林・柑子山・清水平の八ヶ村を含んで居た。

ミナミシジユウマ 南四十萬 石川郡四十萬の内の小字。

ミナミシラエシヨウ 南白江庄 能美郡に在つた。文永四年に延暦寺東塔に寄せられてから、永く妙法院領となつてゐた。今輕海郷白江村がある。

ミナミシンボ 南新保 石川郡鞍月庄に屬する部落。文明八年十一月四日附秀興・貞秀から一揆中に宛てた判書に、『攝津修理大夫知行分加賀國倉月庄内南新保西方事、度々被成奉書、領知無相違之處及違亂云々。』と見える。

ミナミセンゴク 南千石 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ミナミチユウジヨウ 南中條 河北郡井上庄に屬する部落。

ミナミチヨウ 南町 金澤の町名。本願寺文書永祿十年十一月五日『金澤殿へ奉寄進廻室之事』と首題したものに、南町ひろおかや

と署名するものを初見とする。世に佐久間盛政時代の尾山八町を數へるものは信を措き難いが、南町がその中に在ることは正しい。

ミナミテ 南出 珠洲郡馬縹の内の小字。

ミナミトキクニ 南時國 鳳至郡時國のうちもと幕府領であつた部分を、明治に至つて南時國と稱した。南時國は上時國・曾々木に分かれ、その曾々木は西時國との入會である。

ミナミニグン 南二郡 ↓ミナミゴホリ南郡。

ミナミノマル 南丸 前田利長が九月十六日附(年不詳)伯耆・圖書二人宛の手書に、『わざと申入候。仍はねばししの石がき・南の丸とれも出來申候。』とある。南の丸の名は後世金澤城内にない。本丸の南方であるから、後の御花島の地かと思はれる。↓ハネバシ 跳橋。

ミナミハタシヨウ 南島庄 天台座主記文永五年に加賀國南島莊が見えるが、その位置は明らかでない。

ミナミハラ 南原 河北郡小坂庄に屬する部落。

ミナミヒロラカ 南廣岡 石川郡戸板郷に屬する部落。

ミナミモリモト 南森下 河北郡井上庄に屬する部落。龜尾記に、森下の邑長龜田金右衛門邸内に祖先大隅銀齋の塚がある。この地の東山に殿館のあるのが、その館跡であると記する。鐵齋の墓碑は今も存するが、それを鐵齋とするものは哲齋龜田高綱のことなるべく、果して然らばかゝる所に埋瘞せられた所を見ぬ。

ミナミモン 南門 金澤城内三ノ丸から鶴丸へ通ふ門で、兩曲輪境の堀には、所謂土橋

がある。金城深秘録に、『御燒失以前、三ノ御丸南御門は、末森大手の門の材木也と申傳候。』と見えて、この燒失は寶曆九年のことである。

ミナミヤマ 南山 鳳至郡栃木の内の小字。

ミナミユウラホ 南湯浦保 ↓ユウラホ湯浦保。

ミナミヨコネ 南横根 河北郡井上庄に屬する部落。

ミナミヨコネジヨウ 南横根城 河北郡横根の山上なる加賀・越中兩國の界に在つて、地方人は城山と呼ぶが、堡主は明らかでない。

ミナミヨシダ 南吉田 羽咋郡押水北庄の吉田は、明治に至つて南吉田と改められた。

ミナミリユウガババ 南龍ヶ馬場 ↓リユウガババ 龍ヶ馬場。

ミナミロクマイマチ 南六枚町 金澤の町名の次に南六枚町・北六枚町と見え、國事昌披問答に載せた金澤町名にも亦記載される。六枚町の裏で、今柳町に屬する。

ミナモトシタガフ 源順 圓融天皇の天元二年正月能登守に任ぜられた。順は嵯峨天皇四世の裔で、博聞強記、學和漢を該ね、詩文に巧みに和歌に練達であつた。初め天曆七年を以て文章生に擧げられ、官を累ねた後、伊賀・伊勢の守に任ぜられんことを請うたが許されなかつたので、順は之を憤り、無尾牛の歌を作つて懷を述べた。天皇則ち之を憐み、順をして能登に赴かしめ給うたといふ。

ミナモトミチタネ 源通胤 初諱通泰・隆

永。通世の男。永正十六年父の加賀に薨じたるを以て、十八年正月下國し、大永二年七月上洛したが、三年四月又國に就き、五年十月上洛、七年權中納言に進み、享祿二年八月五日三十二歳を以て薨じた。

ミナモトミチナリ 源通成 後深草天皇建長六年白山の衆徒等、國司源通成に對して不満を抱き、正月八日本宮の神輿を進發せしめ、次日之を國衛に振入れた所、十日金劍宮の神輿亦發し、十一日岩本の神輿も之に隨うたとあるが、この事件の首尾は明らかでない。

ミナモトミチナリ 源道濟 一條天皇の頃、源道濟能登に下つた。是より先道濟の父方國能登守に任ぜられたが、既に老臘の身で、多年住み慣れた花落を離れるを悲しみ、先づその子道濟を遣はして、道路山河の險易と、任國風土の善惡とを視察せしめた。時に親戚故舊皆その行を壯にせんが爲に來り會したが、この時道濟がその別離の情を詠じた『とまるべき道にはあらず中々にはあはでぞけふはゆくべかりける』の歌は、源道濟集に見える。

ミナモトミチナリ 源通爲 權中納言源通胤の子。永正十四年十一月生。天文六年加賀に下國、十年上洛。永祿二年再び加賀に下り、八年九月三日その地に於いて癰腫を病んで歿し、此の日内大臣に任ぜられた。

ミナモトミチヨ 源通世 前内大臣源通秀の子。寛正六年生。權中納言に進み、永正元年之を辭し、十六年十二月廿六日加賀に薨じた。享年五十五。

ミナモトヨシツネ 源義經 (一)義經の潜匿一 文治元年頼朝院宣を得て義經を追討せんとしたので、義經は所々に潜匿した後、三年